



こだち News

巻頭言

客観的評価

伊敷病院 神田橋條治



「美味しいお米の基準を作る」との新聞記事を目にした。その基準で最高点を取ったご飯を「美味しくない」と感じたら「味音痴」と診断されるのだろうと連想した。客観的評価の流行がここまで来たかと腹立たしい。心理臨床の分野にも「客観化」の侵食があり、エビデンスに基づく心理療法が言い立てられていると聞く。

治療薬の有効性の判定・評価では「二重盲検法」が定法となっている。評価の対象となっている薬物と別に見分けのつかないそっくりの偽薬とを用意し、似たような2群の患者にそれぞれ服薬させて効果を判定する。偽薬とハッキリ差の出る効果が得られたら、有効な薬物だと判定される。まことに分かりやすい手続きである。しかし、処方する医師が本物の薬と偽薬とをあらかじめ知っているとは患者に対する態度に差が出て、暗示作用の濃淡が働いて客観性が損なわれる恐れがあるので、医者も患者も知らないようにしておく工夫が生まれた。これが二重盲検法であり、必須の手続きとして確立している。

心理臨床でも科学化の一環としてこの手法を導入したらというパロディを思いついた。〇〇療法の有効性を判定するのに、実際の治療群と待機群とを分けて経過観察をする実験は昔から行われている。偽治療を行う群をコントロールにする研究もあったようだ。

だがそれでは治療者が本治療と偽治療とをあらかじめ知っているから客観性が薄い。客観性の極致は二重盲検法であるから応用したいが、それは難しい。コントロールとなる偽治療群とは自身はきちんとした療法を行っているつもりだけれどまったく本物とは言えない下手な治療者であり、それと本物の治療ができていない治療者の担当群との効果の差を比較することとなる。仲間内での評判では二種の治療者の判別はできているにしても、分別のための客観的指標が無いし、新たに作ろうとしても、その作業自体が難事であろう。そもそも、個々の治療者の暗示作用の濃淡を均一化することは不可能であろう

し、心理療法から暗示作用を排除することの当否は本質論に立ち戻る議論になろう。

学生時代に医学部図書館で古い医学雑誌を見ていて気づいた。沢山の治療薬や治療法が記載されていて、その大部分がもう影も形も無いことである。どこかの教授が半ば本気に「新薬は効果が下がる前に出来るだけ多くの患者を治しなさい」と語られた。一般医学においても偽薬効果は絶大なのであり、それを排除することはもったいないのである。精神療法の先達の一人はメスメルであることを思うとき、メスメルの療法で治った数多くのクライアントは、恐らくは自らに内在する自然治癒力の発動の機縁を得たのであろうと考える。だが、却って不幸な結末になったクライアントもあっただろう。下手な治療者とは無益な治療者であるだけでなく、有害な治療者の時もあり、偽薬の副作用も知られている。つまるところ、治療者・治療法・薬と個々のクライアントとの相性のテーマであり、副作用もまた相性の良くない外界への拒否という自然治癒力の現われかも知れない。

さすれば、治療途中での不快事象の発生を相性・拒否反応・自然治癒力の現われの視点から互いに検討し、実験としての治療中断を話し合うことを技法として導入するのが実り多いと思う。「好転反応」などの概念への志向は無知への道である。

治療とは「いのち」への外部からの侵襲であり、その良否は結果で判断すべきである。との論理が客観的評価の根底にある姿勢であろうから、絶え間なく結果をフィードバックする作業は同一の姿勢であり、かつ、生体の本質である自然治癒力の構造を模していることになるのかもしれないし、自らの生体の志向を味わいそれに添ってゆく生き方をクライアントに暗示する治療技法になるのかもしれない。エビデンスという用語が醸し出す、多数決の雰囲気は心理臨床の魂を台無しにするかもしれない。イヤだイヤだ。

神田橋條治先生公開スーパービジョン

2015年11月8日（日）10:00-13:00、九州大学西新プラザ大会議室にて、神田橋條治先生の公開スーパービジョンが行われました。事例発表者は、医療法人啓仁会平沢記念病院の北野祥子先生でした。約200名の方にご参加いただきました。

当法人でこれまで行われた公開スーパービジョンでは、事例発表者が事例の経過をまとめたレジュメを作成し、それをもとに事例検討を行うことが通例となっていました。今回の公開スーパービジョンは、レジュメを用いない形式で事例検討が行われました。神田橋先生は、この方式を推奨される理由について、「患者さんはレジュメを作っていないからね」とさら



りと述べておられました。北野先生が、クライアントの情報やクライアントと会われることで生じるご自身の感覚などを少しずつ語られ、それに対して神田橋先生が質問をしたり、連想を語られたり、面接のコツを教えてくださいました。

時には北野先生のセラピストとしての在り方についてコメントされたりと、お二人での対話を重ねながら公開スーパービジョンは進行していきました。レジュメを用いないことで、まっさらな状態からその場で臨床像が形作られていくプロセスが展開していき、あたかも面接がその場で行われているかのような雰囲気でした。フロアーの皆さまもその雰囲気に引き込まれ、ともにその雰囲気を味わうような場が作り上げられていったように思われました。

神田橋先生は、事例についてのコメントに関連して、フロアーの皆さまの脳を刺激するかのように、様々な先生のお考えをお話ししてくださいました。印象的だったのは、「胎内の愛着障害」についてのお話です。子どもが母親の胎内にいる間に母親が大きな精神的ストレスをうけることによる子どもの愛着障害があるのではないかとおっしゃっていました。「胎内の愛着障害」なのかどうかを確かめる「技」（参加者みんなでやってみました）や、愛着障害を癒す動物のお話など、神田橋先生の発想はどんどんと広がっていきま



参加者のご感想には、「レジュメがなく、発表者の方も何もメモを持たれておらず驚きました。カウンセリングを拝見しているようでした」「ああと目が開かれるような感覚を得ることが何度もありました。臨床につながりそうです」「自分の体験や臨床経験等を思い出しながら、照らし合わせながら聞き入っていました」といったものがありました。参加者の皆様にとっては、新鮮な驚きや発見に満ちた体験となったようです。



公開スーパービジョンの感想 北野祥子先生(平沢記念病院)

この度は貴重な機会を与えて頂き、神田橋先生、こだちの皆さん、本当にありがとうございました。発表を振り返ってみると、知的な理解や言葉ではなく、グッと胸が苦しくなるような感じや、温かく癒されていくような感じが“体験”として私の中で強く残っているように思います。会場内に漂っていた温かな雰囲気や一体感、面接で感じていたものを神田橋先生や皆さんと共有できていた感じは今もクライアントと会うときの支えになっています。



第十回定時総会と特別講演会のお知らせ

第十回定時総会

日時：2016年5月22日（日）11時から11時45分

場所：九州大学医学部百年講堂 中ホール

第十回定時総会特別企画 杉山登志郎先生特別講演会

日時：2016年5月22日（日）13時から14時30分

場所：九州大学医学部百年講堂 中ホール

講師：杉山登志郎先生(浜松医科大学児童青年期精神医学講座・客員教授)

演題：発達障害とトラウマ：複雑性PTSDへの治療

※詳細については、同封のチラシをご参照ください。



お知らせ

平成27年度 福岡県精神保健福祉大会 こころの健康づくり大会で
当相談室が「福岡県地域精神保健協議会長表彰」を受けました

2015年11月6日（金）にウエルとばたにて行われた「平成27年度福岡県精神保健福祉大会 こころの健康づくり大会」にて、当相談室が「福岡県地域精神保健福祉協議会長表彰」を受けましたので、ご報告いたします。

当相談室が臨床心理学の専門家によるカウンセリング、家庭学習支援事業、各種研修事業などにより、地域住民のこころの健康に寄与してきたことが認められました。今後も、この賞に恥じぬように、地域の皆様にお役に立てる臨床心理サービスを提供できるよう、当相談室一同で尽力して参ります。

第17回 サイコセラピー学会
大会テーマ「ことばを超えて通い合う」

九州大学の先生方のご発表が多数予定されています。
当法人理事長の黒木俊秀が大会長を務めます。

会 期：平成28年3月26日（土）・27日（日）

会 場：九州大学医学部百年講堂中ホール1・2

（〒812-8582福岡市東区馬出3丁目1番1号）

主 催：第17回日本サイコセラピー学会大会実行委員会

後 援：公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団

大会URL：<http://www.nihon-psychotherapy.jp/jfp17th/index.html>

主なプログラム：

特別講演

北山 修（九州大学名誉教授・白鷗大学副学長）

招待講演

田嶋誠一（九州大学大学院人間環境学研究院・教授）

シンポジウム1 ことばを超えて通いあう ―非言語的技法を用いるサイコセラピーの現在―

シンポジウム2 愛着の病理と支援

市民公開講座 心の健康セミナー2016 in 福岡

共 催：九州森田療法セミナー事務局

NPO法人生活の発見会九州支部

後 援：公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団

九州大学大学院人間環境学府
臨床心理学同窓会 特別企画
「特別対談 前田重治先生・北山修先生
～臨床心理学の創造性～」

九州大学名誉教授の前田重治先生と北山修先生の特別対談です。当法人理事長の黒木俊秀が司会を務めます。

日時：2016年4月24日（日）14:00～16:00

場所：九州大学医学部百年講堂 大ホール

参加対象：一般・九州大学大学院人間環境学府臨床心理学同窓会会員（定員520名）

参加費：一般3000円

同窓会会員・学生・院生2000円

お問合せ：

九州大学大学院人間環境学府臨床心理学同窓会

〒812-8531 福岡県福岡市東区箱崎6-19-1

E-mail: jinkan.tokubetsukikaku@gmail.com

主催：

九州大学大学院人間環境学府臨床心理学同窓会

後援：

一般社団法人福岡県臨床心理士会

特定非営利活動法人九州大学こころとそだちの相談室

掲示板

こだちよりお知らせ

書籍紹介 当法人顧問 田嶋誠一著書

現実に関入しつつ心に関わる[展開編] 多面的援助アプローチの実際

田嶋 誠一（編著）
金剛出版

本書は、〈壺イメージ法〉と称するユニークなイメージ療法を考案し、さらには不登校やいじめをはじめ青少年のさまざまな心の問題相談活動や居場所づくりネットワークを活用した心理的援助を行ってきた、田嶋誠一の独創性溢れる臨床実践と田嶋から影響を受けた周囲の臨床家たちによる論考を集約したものである。テーマは、スクールカウンセリング、児童虐待、いじめ、不登校、ひきこもりなどの学校臨床、境界例や強迫、うつ等の疾患児童福祉施設における暴力問題と多岐に亘っている。



その場で関わる心理臨床 —多面的体験支援アプローチ

田嶋 誠一（著）
遠見書房

本書に描かれている心理的支援は、従来の心理的なとらえ方だけでなく、より多方向の解決を模索するものである。密室から脱し、コミュニティやネットワークづくり、そして、「その場」での心理的支援、それを支えるシステムの形成—それが著者の言う、多面的体験支援アプローチである。本書には、著者が長年にわたって実践してきた「その場で関わる心理臨床」の実践と理論のすべてが網羅されており、すべてのセラピストが目指すべき極点の一つと断言していいだろう。この本は明日を生きる臨床家にとって必読のものである。



○入会のご案内

こだちは今年で10年目を迎えます。地域に定着した心理臨床サービスを継続するには、収支の安定が求められます。NPO法人の会員となって私たちの活動を支えていただくと幸いです。会員になっていただける方はぜひこだちまでご連絡ください。なお、**会費は1年毎の更新制です**。会員の方で本年度分の会費の納入がお済みでない方は納入をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○ご支援のお願い

当NPO法人では会員以外の方からも、ご寄付をおまちしております。関心や興味をもたれた方はぜひご連絡ください。

編集後記

3月でこだちの9年目が終わり、4月からは節目の10年目が始まります。これまでこだちを大事に育ててくれた方々の想いを受け継ぎながら、充実した1年間にして参ります。(Y)

交通のご案内



■ ■ 地下鉄でお越しの方 ■ ■

福岡市営地下鉄空港線西新駅下車後
7番出口より徒歩にて約10分



特定非営利活動法人 九州大学こころとそだちの相談室

〒814-0002
福岡市早良区西新2-16-23 九州大学西新プラザ内 産学交流棟

TEL 092-832-1345 FAX 092-832-1346
HP <http://kodachi.or.jp/>